レクチャー

初心者のための質的研究ナビゲーション　連載　第三回
―質的研究例（その２）：介護する女性―

筑波大学　医学医療系
橋爪祐美

連載第3回、質的研究例（その2）は、グラウンデッド・セオリー法（以下、本法）による手順の実際を解説する。研究課題は、勤労女性が就労継続を望みつつ家族・老親の世話や介護の義務感の狭間で揺れ動く実情の理解である。なお、私はインタビューによってデータ収集を行い介護場面の観察等は行わなかった。また本法そのものについての解説は、Anselm Strauss と Juliet Corbin 両博士の 1990 年出版の著書（Basics of Qualitative Research, Sage Publications, Inc. 邦訳版は質的研究の基礎、グラウンデット･セオリーの技法と手順、南裕子監訳、医学書院より 1999 年出版）、萱間真美先生の著書（質的研究実践ノート、医学書院より 2007 年出版）、木下康仁先生の著書（グラウンデッド・セオリー・アプローチ、弘文堂より 1999 年出版、グラウンデッド・セオリー・アプローチの実践、弘文堂より 2008 年出版）を専ら参考にした。なお、これらの参考著書から引用した部分（本文中に「」にて示した）および関連する部分は参考文献に該当箇所を提示した。

Contents：

４．グラウンデッド・セオリー法による手順の実際（コーディングからカテゴライズまで）
５．結果と評価
６．スーパーバイズの有用性

４．グラウンデッド・セオリー法による手順の実際

1）分析手法の概観

具体的な分析手順に進む前に、本法の分析方法に関して理解しておくべき 2 つのポイント；(1) 理論的サンプリング法と 3 つの coding、(2) サンプリング、coding と質問内容の変遷について解説する。なお (2) では、私の研究課題の結果の概要を引用して述べた。

（1）理論的サンプリング法と 3 つの coding

本法における調査対象の選定は理論的サンプリング法（Theoretical Sampling）と呼ばれ、open sampling、relational and variational sampling、discriminate sampling の 3 種類がある[1)]。理論的サンプリングとは、「理論的に証明された概念にもとづいたサンプリング」[2)] とあるが、私は関心ある現象を説明する理論を導き出すための、意図的な調査対象の選定と理解している。また本法のデータ分析手法は open coding、axial coding、selective coding の 3 種類ある。Open coding は関心ある現象を説明する概念を数多く生成・抽出する[3)]。Axial coding では、open coding で生成・抽出された概念がいくつかのまとまりを帯び、上位または下位の概念に位置づけられたり、因果モデルに沿った構造が見え始める[4)]。Selective coding では、その現象を特徴づける中心的な概念が明確となり、他の複数の概念との関連も洗練され、因果モデルに沿って現象の発生から転帰に至るまでを構造的に表した理論が開発される[5)]。

調査対象の選定とデータ収集および分析は同時に進行する[6)]。また分析が進むにつれてインタビューの際の質問内容も変わる[7)]。

(2) サンプリング、coding と質問内容の変遷

① Open sampling と open coding

第 2 回連載でも一部述べたが、私は調査対象として以下の 2 条件を満たす勤労女性を選んだ；①既婚者で子どもをもち、老親と同居している、②老親の認知機能に多少の衰えがあっても主治医から認知症の診断を受けておらず、中等度の寝たきり状態にある。理由は、一般的な家族形態であること、老親が中等度の寝たきり状態であることから、女性は介護しながら働くことが比較的可能と考えられ、老親の認知機能が比較的保たれていることから、女性と老親や家族の間で女性の慣行的な規範に関する話題が取り上げられることが想定され、女性の就労や自己実現の希求と家族・老親の世話・介護に関する義務感の狭間で揺れ動くような実情が、より強く導き出されると考えたからである。このように、調査対象は明らかにしたい現象について、最も豊富な情報を提供してくれる人を選ぶ。とくにデータ収集の最初の段階では、関心ある現象について広範囲に多様な価値観、態度、思い、考え方を拾い出す意図で、様々な背景をもった人を選ぶ[8]。私の場合は姑を介護する嫁介護者からインタビューを始め、次は実母を介護する娘、その次は実父を介護する娘、その次は舅を介護する嫁のように、女性と老親との関係（実親か配偶者の親か）、老親の性別を変えてインタビューを進めて行った（都合により娘介護者や嫁介護者のインタビューが続くこともあった）。対象を選定する際の属性・特性の検討は演繹的な思考である[9]。本法ではデータを帰納的に分析して潜在的な特性や次元を探りつつ[10]、新たな事柄やその関係性を提示する対象の選定を演繹的に思考して進めるように、「帰納的思考と演繹的思考を行き来する」[11]。

Open sampling の段階で 4 人の女性にインタビューした。一人は嫁介護者で、他 3 人は娘介護者であった。女性の職業、子どもの年齢、老親の認知機能や、要介護状況に陥った経過は様々であった。また、この段階でのインタビューの質問内容は主に以下の 3 つであった。

i. 昨日一日の過ごし方（朝起きてから夜寝るまでの間どのように時間を過ごしたのか）
ii. 老親の世話をするようになった経緯
iii. 就労と介護を両立させる生活の大変さ、息抜き、今後、危惧されること

② Relational and variational sampling と axial coding

4 人のインタビューと open coding を進めたところで、次の 5 つの概念と二つのプロセスが生成・抽出された；

i. 規範：老親・家族の世話を、女性が自分の余暇活動よりも優先して行うことを、社会一般において好ましいとする考え方、価値づけ
ii. 変化：『時代は変わった』という、規範に沿う重要さが時を経て変化したとの認識
iii. 戦略：時代の変化に理由づけて、就労を続けることや余暇時間を確保し生活を楽しむことの正当化
iv. ストレス状態：変化に理由づけ、規範に沿わない行動をとる一方で感じる後ろめたさ。規範意識の高い老親や夫から批判を受けて感じる葛藤
v. 自己実現：介護しながら就労を続ける女性が得るもの。現金収入や就労による社会貢献を通じて感じる達成感

二つのプロセスとは、女性の提供する介護量が時間を経て変化する過程である；

i. 無我夢中の段階から介護量減少のプロセス：介護を始めた時点は、無我夢中になって取り組む。介護量が多い、または漸進的に増える過程。女性の介護そのものへの慣れや、老親が小康状態を保ち療養生活に慣れることによって、提供する介護量が減少する段階に至る
ii. 介護量減少から介護活動からの退却のプロセス：介護サービスの利用等により、女性自らが提供する介護量は一定に保たれる。その後、老親の虚弱化や寝たきりの程度が進行したり、女性の健康状態の悪化が生じたり、介護する女性と老親との心情的な関係の悪化等により、女性自

らが提供する介護量は減る

以上の概念とプロセスの他に、この段階で見えて来たこととして以下の 3 点があった；

i. 勤労女性介護者にとって“規範”がストレスフルな状況を引き起こす原因となりやすい

ii. 配偶者や老親の規範の価値づけ（規範意識。本法でいうところの、特性として捉えられる）の程度（本法でいうところの、次元。強い～弱いの側面があると解釈された）が、配偶者による家事介護分担（特性）の有無（次元）と、老親のセルフケアの前向きさ（特性）は、老親がセルフケアに積極的か消極的か（次元）に関連し、これは女性が就労家事介護を両立する際に感じる負担感（特性）の強弱（次元）と関連する可能性がある

iii. 女性と老親の心情的な関係（特性）が良いかどうか（次元）は、互いの規範意識の高さ（特性）の相違（次元）や、これを背景とした老親の女性に対する日常生活上の手助けの要望（特性）についての女性の受け止め方（次元。肯定的か否定的か）、さらに女性の感じる老親との心情的な関係（特性）の対等さの程度（次元。対等か、そうでないか）に関わる。これらが女性の、その後の老親介護への前向きさ（特性）の程度（次元。前向きか、そうでないか）に関連する可能性がある

以上 3 点は、未だ見いだされていない概念や概念のバリエーション［例：老親や夫の規範意識という“特性”の、次元（強弱）］[12]、さらに概念間の関係を示唆し、新たなインタビューの指針となる事柄である[13]。理論開発に係わるこれらの気づきは、coding ファイルとは別に、理論ノート（Theoretical Note）[14] のファイルを作成し記録に残した。また次のインタビューにおける質問（同時に分析の視点）として open coding で生成・抽出された概念等をもとに、より深く現象の理解を深めることを意図して以下の 3 つを考案した；

i. 女性がより強く規範を意識し価値づける場面。これらの意識や価値づけの高さの、介護生活における変化

ii. 夫の家事介護分担の程度と老親のセルフケアの前向きさの程度

iii. 女性と老親の心情的な関係の善し悪し。介護生活における、その変遷

インタビュー対象は、嫁または娘介護者の状況を偏らずに把握できるよう配慮した。Open sampling の段階で娘介護者のインタビューが多かったので、relational and variational sampling では嫁介護者を多めに 3 人、娘介護者は 1 人を選定した。対象が娘介護者か嫁介護者であるかの違いで感じたことは、娘介護者ではインタビューの際に『本音』を語ってもらえる感覚が、嫁介護者よりも強く感じられたことであった。嫁介護者でも本音を語ってもらえたと感じられた方は、話の中で老親との心情的な関係に閉塞感を抱いていることが窺われ、私のインタビューを受けることが、その対象の閉塞感を吐露できる場となっていたようにも感じられた（以上は理論ノートに記録した。対象の閉塞感がどこから生じるのかを追及してゆくことが、それ以降の分析の視点に反映されていった）。なおインタビューは当時の私の時間的制約等の事情から全対象に 1 回限りの実施であったため、その場で全力を尽くして語ってもらう努力をするしかなかった。具体的には対象の語ることを感情的に肯定したり否定したりせず、対象の言葉でありのままを語っていただくようにした。こちらが一度聞いてわからないことは聞き返し、対象の解釈と言葉での説明を促した[15]。

分析の際は open sampling で収集したインタビュー・データ、open coding で作成したコードのファイルも含めて継続的比較分析を行った[16]。それによって個々の概念にバリエーションが見いだされ、さらに概念間のつながりや方向性が明らかになっていった。

③ Discriminate sampling と selective coding

Relational and variational sampling と axial coding を進める中で、次の 3 点が見えてきた；

i. 就労継続は女性にとっては現在の生活を支える経済的基盤や、社会貢献を通じて

感じる達成感・自己実現の意味だけではなく、女性の老後生活のための経済的基盤としての意味もあることから、勤労女性は就労継続を願っている

ii. 人の規範意識の高さは、社会生活を送るうえでの行動の仕方や考え方の奥深くに刷り込まれており、変えにくい価値観である。『規範を意識しない』と語る女性であっても、自らの規範意識から就労継続を疑問視した時期もある。一般的に男女平等が唱えられる現在、女性のみが家事介護責務を負うとする規範を踏襲する重要性を、『時代が変わったから意識しない』と語る女性であっても、紆余曲折をへて『意識しなくなった』状況に至ったと解釈できた。そこには、特定の戦略があると推測された

iii. 女性と老親の規範意識の高さに違いがある場合、とくに老親の規範意識が高く女性のそれが低い場合は、老親が自分で出来る身の回りの事（日常生活動作）についても女性に手助けを求めるため、老親のセルフケアを促す女性では葛藤が生じる。女性は、このストレスフルな状況に対し、ある戦略をもって克服を試みていた

そこで次のインタビューにおける質問内容（同時に分析の視点）は以下の 2 つとし、この段階で新たに 3 人（娘介護者 2 人、嫁介護者 1 人）のインタビューを加えた；

i. 介護生活におけるストレスフルな状況と、そのような気持ちの解放の仕方

ii. 介護することや、介護しながら就労を続けることの女性にとっての意味（意味づけ）。就労と家事介護を両立させる生活を、女性がポジティブに捉えるメカニズム

なお、ストーリーライン、十分に発展していないカテゴリーの充実およびカテゴリー間の関係を検証するため、これまで収集したデータにも目を通した[17]。

2）コーディングとカテゴライズの実際

はじめに継続的比較分析法について述べる。本法のデータ分析手法は 1 ）－ (1) で述べたように 3 種類の coding であるが、継続的比較分析法は 3 つの全ての分析過程において用いられる基本的なテクニックである。

分析に関わる作業として、インタビューしたらテープや IC レコーダーに録音した音声をもとに逐語録を作成しておく。

分析は継続的比較分析法を用いながら、1 次コードから open coding、open coding から axial coding、axial coding から selective coding と進めてゆく。3 つの coding が「一部重なりながら、段階的に次の coding へ移行」してゆく[18]。最初の段階で生成されたコードや概念は集約・洗練されカテゴリーとなり、分析が進むにつれて、その抽象度は上がってゆく。“カテゴリー”とは、生成・抽出された概念よりも、「より高い抽象度を帯びた概念」を意味する[19]。最終的には、限定されたカテゴリーによって現象全体を論じることが可能となり（story line）、新たな概念が生成されない段階（saturation）に達する[20]。初期の段階で取り扱われるコードは幅広く多様であるが、最終的には、抽象度の高い、複雑な概念構造をもつ限定されたカテゴリーに集約される。この一連の分析の様相は、らせん構造（スパイラルまたは「オーバー・ラップ」[21]）として捉えることができる。

（1）継続的比較分析法（constant comparative method of analysis）

継続的比較分析法は萱間（2007）によれば、「概念とデータの対応を重視し、ある特定の領域におけるデータに基づいた具体理論の生成を目的に対応できる方法」[22] とある。質的データの分析手法は様々あるが、データを比較し、カテゴリーとしてまとめあげてゆく作業自体は、本法に限らず質的帰納的な研究手法において広く使用されているものと考える。作業としては逐語録を熟読し、調査対象が語った一言一句について文頭から“何らかの意味がとれそうなところ”で区切り（unitizing）、ワープロ・ソフトのカット機能を用いて取り出し、白紙（ワープロ・ソフトの新規作成機能）にペーストし、それに仮の

コード名をつけて一つのファイルとして保存する（これを、仮にファイル1とする）。

先ほどカットされた逐語録の残りの文頭から、新たに“まとまって意味がとれそうな逐語録の部分”を取り出す。そしてファイル1に取出した“意味のまとまり”と比較し、同様の意味に捉えられると判断した場合、ファイル1にその逐語録の部分を、ワープロ・ソフトのペースト機能を用いて張り付ける。ファイル1とは異なるものと解釈・判断された場合は、新たな白紙を作成し、それに逐語録の部分をペーストし、また別の仮のコード名を付けた別のファイル（ファイル2）として保存する。この作業を、一つのインタビュー全体に対して行う。一つのインタビューの中で、いくつものファイルが作られることになる。一つのインタビューの分析が終わったら、次の対象者のインタビューの逐語録に同様の作業を行う。“意味のまとまり”の比較は、先に行った調査対象者の分析で作成したファイル全てと行う[23]。

この作業とは別に、一人の調査対象者に関する検討のテクニックとして、コーディング・シートを用いた作業も有用である。コーディング・シートとはワープロ・ソフトで作成した2段組みの表である[24]。左側のコラムに逐語録を貼り付け、右側のコラムに分析した内容を記載してゆく（表1参照）。一人の調査対象者に関する構造的な検討は、axial coding から selective coding の段階で、出来上がってきた因果モデルの妥当性を対象毎に検討する際に役立つ。

表1：コーディング・シートによる分析例

データ	1次コード
今まで自分の子ども世話してもらっていたのに、（母が）だんだん出来ないことを少しずつしてあげて、それがだんだん多くなって。だから（介護することを）自然に受け入れました。でも私、次女なんです。なんで私がって思うことがある。はじめは訳わからないこと言って夫を困らせた。一人では（働きながら家事介護）できませんが家族に手伝ってもらうのはずるい気がする。私の都合で家族を利用しているだけみたいな。訪問看護の人に対しても。 （介護をはじめた当初は）必死でしなくちゃいけない気持ち。でも今は（訪問）看護婦さんにしてもらえることはしていただいて、自分しか出来ないことだけきちんとしようっていう気持ちに変わってきています。10何年前からみると自分も年いって体力が続かないし、気持ち的にも続かないです。 ショートステイを頼んで家族で旅行に、遊びに行ったんです。なんとなく後ろめたいものがありました。やっぱり、なんていうのか年寄は家族で看るのが当たり前なのを、他の人に委ねることに対して、それこそ昔の人だったらしない、今の若い人はとか、そういう感覚で見られるみたいな。母も父の母（当事者の祖母）が具合悪くて結構、長い間看ていたんです、仕事を辞めて。そのときは一途に世話をしていて、そんな（年寄を）置いて（他人に任せて）どっかいくとか（笑い）そんなことなくって。 最後の手段として介護休暇も考えています。でも今、保母さんなんて掃いて捨てるほどいるでしょう。母は介護のために仕事を捨てたけども、私には辞めてほしくないって言ったんです。だから仕事楽しいっていうより、ここにしがみついておりたいっていう感じあります。勤め続けたいですね。保母になるのが夢だったっていう、だんだん夢のほうは少なくなってきているけど（笑い）でもやっぱり、頑張れるのはそれがあるからだって思いますよね。	・プロセス：だんだん、自然に ・本来は長女がすべき ・夫にあたる ・一人じゃできない ・ズルい自分：家族と対等に分担するものではない 一人ですべきこと ・プロセス：必死でする→できる範囲に ・介護者も年を取る ・気力、体力の限界 ・直言しない“遊び” ・後ろめたい“遊び” 年寄は家族で看るのが当たり前と、今の若い人 vs 母は辞職し介護に専念してた ・言われないが、思われているのでないかを危惧 ・笑う：自分を笑う ・再就職の難しい時代 ・母と自分は生きる時代が違う ・生きがいとしての仕事、現実（夢でなく） ・笑い：現実を笑う ・辞めない、続ける、 ・頑張る、頑張れる

(2) 1次コードから open coding

前項で述べた仮のコード名とは、取り出した逐語録の要約と捉えられる。とくに1例目の分析など最初の分析の段階では、無理に解釈して言葉を割り当てると恣意的になりやすく適切ではない。むしろ中立、中庸な(neutral)表現の言葉を割り当てるのが良い。記述的コード（descriptive code）とか1次コードとも呼ばれる。うまく要約する言葉が思いつかない場合など、対象が語った言葉をそのまま割り当てることもある（これを in vivo code という[25]。コード名の言葉の長さにはこだわらない。インタビューが進みデータがある程度たまると、ただの要約から解釈を伴った言葉で言い当てられるようになる。これを解釈的コード（interpretive code）と呼ぶ。ファイルにたまったデータから、自然と“言葉が浮かび上がってくる”感じを伴う[26]。要約やコード（作成されたいくつものファイル）は比較され、集約・削除されてゆく[27]。表2は、1次コードの一例、“笑い”のファイルの一部である。

表2：笑い

データ（語った対象の ID）
【手抜きの自分を笑う】
・家に帰ったらもう疲れちゃって。夕食を食べて1回座ったら、動くのはもう嫌になる。でも、他の人に聞いたら、それから掃除するっていう人がいて、すっごいって思う（笑い）（ID1）
・ショートステイを頼んで家族で旅行に、遊びに行ったんです。なんとなく、後ろめたいものがありました。やっぱり、なんていうのか年寄は家族で看るのが当たり前なのを、他の人に委ねることに対して、それこそ昔の人だったらしない、今の若い人はとか、そういう感覚で見られるみたいな。母も父の母（当事者の祖母）が具合悪くて結構、長い間看ていたんですよね、仕事を辞めて。そのときは一途に世話をしていたから、そんな（年寄を）置いて（他人に任せて）どっかいくとか（笑い）そんなことなくって。（ID2）
・最初は一生懸命、姑をお風呂に入れました。仕事から一旦、家に帰ってきたりして。そのうち、それは疲れましたんで訪問看護の人にお願いして、あと私が出来ることはして、という風にしたら、仕事もやりやすいし、イライラしない、と思いました（笑い）。姑はきっと、あんまり私が、（世話）してくれなくなったって思っているかもしれない（笑い）（ID7）
【あきらめ→受け入れの笑い】
・どれだけ父に自立が大切よって言っても絶対に私の言う事は聞かない。嫌になる（笑い）（ID3）
・ご飯の用意したりなんだりするのは私1人ですね。夫は、そんな家の事は女のすることって思っていて、手伝ってやろうっていう気はありません。私は夫に、今は男性と女性が協力し合う時代よっていってやったら、夫は『そんな女はいらない』って言うんですよ（笑い）(ID4)
【老親に従わない自分を笑う】
・子どもは、私とおじいちゃんが仲悪いの十分しっているんです。でもおじいちゃんに子どもは悪い言葉とか、絶対に言いません。おじいちゃんが何かしてくれって言えば素直にするし。おじいちゃんに私がイライラっとくるとき、今じゃもう子どもも大きいので私を慰めてくれたり（笑い）。介護していて、そういう面は、いいかなって思います（ID5）
・おばあちゃんはずっと、私をお手伝いさんっていう見方をしてきたと思います。私はずっと従ってきましたが、ある日とうとう、言いたいことを言ってやりました（笑い）（ID6）

(3) Open coding から axial coding

Axial coding の段階では、open coding で生成・抽出された概念を集約・削除しながら、時間の流れと起承転結の意味合いを帯びた因果モデル（パラダイム・モデル）に位置づけてゆく。パラダイム・モデルとは、「原因となる条件、現象、文脈（コンテクスト）、介在する条件、行為・相互行為の戦略、帰結」の要素から構成された分析のための枠組みで、数ある質的帰納的研究手法の中でも本法

を緻密で正確と特色づけている[28]。これらの要素を簡単に説明すると、

①原因となる条件：理論的に捉えたい現象を引き起こす出来事

②現象：研究者の関心ある現象。様々な条件下でバリエーションをもって捉えられる

③文脈：研究者の関心ある現象に、一貫して存在する背景的な要素

④介在する条件：行為・相互行為の戦略につなげる、ある現象を一転させるような出来事

⑤行為・相互行為の戦略：介在する条件に伴い対応・処理のためにとられる戦略的行為

⑥帰結：⑤の結果もたらされる、①の落ち着き処

介護する女性の質的研究の場合、分析は、1) ー（2）ー②で示した、5 つの概念：規範、変化、戦略、ストレス状態、自己実現に、二つのプロセス：無我夢中の段階から介護量減少、介護量減少から介護活動からの退却、を“練り込む”[29] ように進んでいった。次の実父の介護のために夫と別居している娘介護者のデータ例が示すように、5 つの概念は単純に規範から自己実現へと時系列に進むのではなく、

規範 ⇔ 変化 → ストレス状態 ⇔ 戦略 → 自己実現 と進むように捉えられ、

規範と戦略の間の概念が、“ぐるぐる”と因果関係を帯びて位置づけられる感じを伴った。

データの例：実父の介護のために夫と別居している娘介護者

『働く生活は言うことないくらい、楽しいです。でも本当言うと、父を施設かどこかに預けることも考えています。今の時代はね、そうしている方、たくさんいらっしゃるでしょう。父の介護のために自分たち夫婦の生活を犠牲にして、昔だったら普通の事だったかもしれないけれど。

父はまだ寝たきりではないので、自分で出来る自分の身の回りのことはしてほしいのですが、私の言う事には一切、耳を貸しません。腹の立つことも多いけれど、でも実の親子だし、私以外、介護する者はいないし…。なんだか、いったり、きたりの、そんな気持ちの繰り返しです。』

(4) 分析結果の統合（axial coding から selective coding、saturation の到達）

Open sampling、relational and variational sampling で収集したインタビュー・データについて、open coding、axial coding で作成したコードのファイルをもとに、パラダイム・モデルを用いて概念（上位、下位）の位置づけを検討したところ、それまでの coding 段階で生成・抽出された 5 つの概念と二つのプロセスは、23 のカテゴリーから構成される 6 つの段階（Step）に編成された。以下、各 step の概略と story line を述べる。

Step1 自動的に規範に沿う:介護役割を担った女性は無我夢中で就労家事介護を両立させようと努める。老親が脳血管疾患等を発症し要介護状態になり急に介護を始めた場合、女性の体験するストレスの程度は深刻で、自らの健康的な生活はないがしろにされがちになる。女性や周囲の規範意識の高さの程度にもよるが、この段階で女性自身はあまり規範を意識しない。

Step2 介護量を減らす：女性は無我夢中で取り組むことに身体的にも精神的にも限界を迎える。介護への女性の慣れや老親が小康状態を保ち療養生活に慣れることで、女性の提供する介護量が一時的に減少することはあるが、老親の日常生活動作の自立の程度は徐々に低下し、認知機能が低下する場合もある。女性は介護サービスを利用したり、自主的に分担の手を差し伸べる夫や親族等と分担して、自ら提供する家事介護量を減らす。

Step3 時代の変化に理由づける：介護する女性は、メディア、在宅ケアを支援する専門家、他の勤労女性介護者の影響を受けて、且つ将来的に不安定な社会保障制度や雇用市場を考慮して、規範行動（老親や夫の要望を尊

重し、働くのを諦めて家事介護に専念すること）を時代に合わないことだと認識する。その上で、家事介護分担やセルフケアに消極的な夫や老親を説得し、男女平等を訴えて家事介護の分担を求めたり、自立の必要性を訴えてセルフケアを促す等、『時代は変わった』認識に理由づけた働きかけをする。これによって女性自身は、できる範囲で家事介護に取り組み、就労との両立生活の継続を図ろうとする。

Step4 抑圧された感情を抱く：step3 で『時代は変わった』認識に理由づけて規範に沿わない行動をとっていた女性であるが、女性自身の意識にも規範は深く刷り込まれている。女性は規範行動と比べると、手抜きの家事や介護をする自分を恥じたり、老親や夫、子どもに対し申し訳ない気持ちを抱いたりする。その一方で女性は『時代が変わった』認識そのものは妥当と感じており、規範意識の高い身近な周囲から理不尽な批判を受けることに怒りを感じる。

老親が自分でできる日常生活動作について手助けを求めることに対し女性がセルフケアを促し続けても、規範意識の高い老親の態度は変わらない。この場合、女性は老親に対して、また介護することについて嫌気を起こす。介護休業制度の利用は女性にとって収入減、辞職の恐れや同僚への迷惑をもたらす危惧を伴う。施策として介護の社会化が謳われても、変わらず家族、とりわけ女性が担う現実にも、女性は嫌気を起こす。

Step5 解放する：step4 で女性が感じた抑圧された感情を解放するための、女性の認識の仕方や行動が展開される。女性は手抜きの家事や介護をする自分に対する羞恥心や罪悪感を笑い飛ばし、自分の性格に理由づけて開き直り、ありのままの自分に信念を持つ。頼りにならない国の施策よりも、家族で工夫し協力して介護に前向きに取り組む。規範意識の高い老親と女性との心情的な関係が悪い場合、女性は介護への前向きさや老親への関心を失う。

Step6 達成する：以上のプロセスを経て介護する女性は、自分のできる範囲で就労家事介護を両立させる。その結果、女性は実質的あるいは psychosocial な報酬を獲得する。それは、労働の対価として現金収入を得ること、子どもの教育費や介護のための費用・生活費等の経済的ニードを自らカバーすること、職務を遂行し同僚上司から得る評価、働くことを通して感じる社会貢献等の充実感や達成感である。

Story line

老親を介護する勤労女性の心情を説明する最も中核となるカテゴリーは、Step5：解放する、と解釈された。勤労女性介護者は『女性が一人で家事介護を担う』、に代表される伝統的な性役割の追従を、個人のキャリア発達とライフコースの追及を尊重する現代において相容れない事と認識している。女性が就労継続を望む理由は、安定した収入に支えられた生活の維持と、自らが年老いた際の経済的な備えである。近年の悪化した雇用経済情勢や社会保障制度への不安が女性を就労継続に駆り立てる。しかし刷り込まれた規範意識のために、就労継続を望み、個人の人生を楽しむことに価値をおく女性ほど、抑圧された感情を体験する。この否定的な感情の解放のために、女性はさまざまな行動をとる。

中核となるカテゴリーが定まることで、このカテゴリーと他のカテゴリーとの関係や、各カテゴリーにおける下位カテゴリー（サブ・カテゴリー）との関係についても図示できる程に体系的に整理された[30) 31)]。これまでインタビューした 11 人すべての女性の介護生活の実情は、体系化された 6 つの段階と 23 のカテゴリーによって説明が可能であり、これ以上、新たな概念が生成されない段階である、理論的飽和（saturation）[32)] に至ったと見なした。

5．結果と評価

1) 結果について

結果は以下の 2 点から説明される必要がある。

(1) 個々のカテゴリーとサブ・カテゴリーの定義の説明と、代表的データの例示[33)]

(2) カテゴリーとサブ・カテゴリーの関連の

説明（図示含む）[34]

(1) については、4.　2) － (4) に各 step の概要を示した。この詳細と (2) カテゴリーとサブ・カテゴリーの関連図は、学術機関リポリトジ（つくばリポリトジ、Tulips-R）に登録されているので、以下のＵＲＬを参照願いたい。http://www.tulips.tsukuba.ac.jp/dspace/handle/2241/113437

投稿論文の場合、代表的データの例示は投稿規定に示された掲載ページ数や文字数制限を考慮し、必要最低限のものを選定する。先行研究では描かれてこなかった、「現象に含まれる特性や次元を明確に含んだ、読者を納得させうる rich な内容のデータを示す」ことが質的研究法による結果の見せどころである[35]。一方で研究協力者の秘匿性を守るため、個人を特定出来ないように提示するデータは編集を必要とする。

2) 結果の評価について

結果の評価は、(1) 分析結果の信頼性と妥当性の保証と、(2) 先行研究や既存の理論と照合した検討（つまり、考察）によって行う。

(1) 分析結果の信頼性と妥当性の保証

質的研究手法ではデータ分析が「研究者自身の思考や解釈で進められる」[36] ため、研究結果は「恣意的で、その科学性を疑問視する指摘」がある[37]。従って、分析結果の信頼性と妥当性の保証を説明することが、結果の評価として重要になる。介護する女性の研究における分析結果の信頼性の保証は、①ピア・レビュー（peer debriefing）と、②メンバー・チェック（informal member checks）の二つの手続きをもって行った[38][39]。

①ピア・レビュー（peer debriefing）

ピア・レビューは、スーパーバイズを受けることと同義である。私の場合は、本法による研究業績をもつ二人の看護学研究者からピア・レビューを受け、妥当性の検討を依頼した。インタビューの逐語録、分析で作成したファイル、データの区切り方、データの解釈の仕方、概念名・カテゴリー名について、おおよそ 2 週間に一度の機会を設けて提示し、「明らかに飛躍した解釈がないか、データに沿って論理的に展開されているか」について助言を受けた[40]。

② メンバー・チェック（informal member checks）

メンバー・チェックは、「データを提供してくれた調査対象者に分析結果を提示し内容の信頼性を問う」[41]。私の場合、前述したように諸事情からインタビューは一人の対象者につき 1 回限りであった。そのためメンバー・チェックの手続きとしては、ある分析結果を別の対象者に提示し『この内容は、あなたの状況にも当てはまりますか？』と質問した。その対象者が肯定した反応をもって、信頼性は保証されたと見なした。

(2) 先行研究、既存の理論と照合した検討（考察）

一般的に研究論文のフォーマットは目的、方法、結果、考察で構成される。「質的研究手法を用いた論文では、結果の全体像が読み手に理解しやすくなることを重視して結果と考察を分けない場合もある。自分の分析結果の提示だけではなく、他の研究結果等と比べて論じてゆく」ことで[42]、今回新たに生成された理論を、信頼に足る新たな知見（ノイエス）として位置付けることが可能となる。

①先行研究の知見との検討

介護する女性に関する先行研究（拙著　連載第 2 回、3. なぜ質的研究法を選択したのか、を参照）において、わかっていたことは主に次の 3 点であった；a. 勤労女性介護者は、もともと介護と就労の複数の役割をこなす高い能力と介護によるストレスへの対処能力を備えており、非就労介護者と比べて負担感は軽い、b. 女性が家庭内役割を中心的に担い介護サービス利用を否定する社会規範が、介護者にサービス利用を躊躇させる、c. 勤労介護者のストレス対処行動のうち、行動的対処行動として、出来る範囲で介護し気分転換を図って介護者自身の健康管理に留意する。その一方で、認知的対処行動は明らかにされていない。

本研究で明らかになったことは、介護する

女性は就労する一方で、家事も老親介護も優先して取り組むべきことと認識していた点であった。とくに介護者役割を引き受けた最初の段階（本稿の 4.-2）-(4)step1 参照）では、老親が急激に要介護状態となる原因疾患等を発症した場合と、徐々に身の回りの事が出来なくなっていった場合で女性の提供する介護量に違いはあるが、女性自身は、それまで就労と家事を両立させてきた生活同様、全ての役割を果たしつつ就労継続することに懸命に努力していた。また家事や介護は女性が担うものであるとする規範意識は、介護者である女性をはじめ、夫、介護の受け手である老親、近隣や親戚など周囲の人が認識しており（女性の認識から把握）、就労継続や気分転換のための余暇活動は、女性の責務をないがしろにするものと否定的にも捉えていた。介護役割を引き受け、女性が無我夢中で取り組む段階では、介護サービスを積極的に利用しつつも他の家族の助けは借りずに一人でこなそうと努め、不満を訴えることなく余暇活動も控えていた。やがて自分一人で取り組むことに限界を感じ、女性は積極的に介護サービスを取り入れ、夫や他の家族の力も借りて両立を図ろうとしていった。女性は介護サービスを利用しつつ、マスメディア等を介して女性の意思決定を尊重する施策の存在を知り、訪問看護サービスを提供する専門職が老親に身の回りの出来ることは自分で取り組むようセルフケアを促す姿や、周囲の勤労女性がキャリア発達として就労継続し且つ余暇活動を楽しむ姿に触発され、そのように行動していった（step2、step3）。以上の点から、先行研究の指摘 a. の、勤労女性介護者の負担感を軽い、とする見方は適切ではなく、非就労者とは別の意味での負担や困難さがあると捉えることが妥当になる。また b. については、女性は、老親介護を『本来は家族のみで対応するべきこと』と捉え、介護サービスのように家族外部者に委ねることでないとする社会規範も認識していた。しかし家事や介護に家族の手を借りることで、むしろ家族に迷惑が及ぶことを危惧し、その回避のために介護サービスの利用に積極的であった。さらに女性が就労継続にこだわるのは、男女共同参画社会を背景に、多くの女性が男女問わず就労する機会を自己実現の一つとして捉える風潮を味方につけてキャリア発達を重視する理由もあるが、別の理由として経済的ニード(現在の生活費、住宅ローン返済、子どもの教育費、老親の介護費、余暇活動の費用等）の充足や、マスメディアの報道する将来的な国の年金制度破たんの予測や経済低迷に伴う雇用の悪化（配偶者がいつリストラに遭うかわからない等の将来不安）に備え、自らの老後の生活資金ねん出を意図するという理由もあった（step3)。私が介護する女性の研究で最も明らかにしたかったのは、先行研究では明らかにされていなかった、女性が就労継続を望みつつ家族・老親の世話や介護の義務感の狭間で揺れ動く実情であったが、以上のように、昨今の社会情勢を反映して苦悩しつつ、課せられた役割を果たそうと努める女性像を示すことができた。

また先行研究では、介護や家事役割に関する社会規範そのものが介護者にとって抑圧として認識されているという指摘が多かった[43]。これに対して今回生成された理論が明らかにしたのは、介護する女性が、規範そのものを抑圧として認識して老親介護に携わるとする見方はあてはまらないことである。Step4：抑圧された感情を抱く、で示されたように、介護する女性は、形骸化した規範に沿うことが、もはや今の時代にそぐわないと感じる一方で、規範と乖離した自分自身を肯定することもできず、老親や夫に罪悪感を抱き、自分を恥じる。介護する勤労女性にとっての抑圧とは、このような女性の低い自己評価である。このことは近年、着目されている“介護者のうつ”を理解しケアを構築する上で重要となる。

さらに中核となるカテゴリー、step5：解放する、では、先行研究で明らかにされていなかった勤労介護者のストレス対処行動のうち、認知的対処行動が明らかにされた。つまり、介護する女性は、step4：抑圧された感情を、step5：解放する、では『笑い飛ばす』『性格に理由づける』など、ユーモアのセン

スを用いたり、変えられない理不尽な状況の解釈をコントロールしたりすることで、介護する自分のおかれた状況を前向きに受け止めつつ、自己評価を高めていた。

②既存の理論との検討

Step4：抑圧された感情を抱く、のうち、変わらない現実に嫌気が差す（介護保険制度および男女共同参画施策のように、介護の社会化や性役割の見直しを促進する施策があったところで、女性や家族が中心的に家事介護を担う変わらない現実にうんざりすること）は、Seligman（1975）が提唱した学習化された無気力の理論に通ずるところがある。Seligman の理論は、人が意図的におこした活動が結果につながらないことを学習した場合、その後の行動に無気力になることを説く[44]。Step4 で、女性が介護に嫌気を起こした他のイベントとして、女性が老親にセルフケアを促し続けても、規範意識の高い老親が態度を変えないことがあった。このとき、老親と女性の心情的な関係が悪い場合は、step5：解放する、において女性がその後の介護に前向きさを失う点が見出された。これは、Folkman と Lazarus のストレス・コーピング理論[45]を適用すると、次のように解釈できる。つまり、女性が老親介護に前向きさを失うのは、規範意識が高くセルフケアに前向きではない老親に向き合うことで体験する、感情的な衝突を回避するための防衛的な行動と捉えられる。介護する女性が老親介護への前向きさを失った場合、危惧されることとしてネグレクトがある。介護の質を担保しネグレクトを防ぐために、老親と介護する女性の規範意識の相違や老親のセルフケアへの前向きさの把握、介護する女性の低い自己評価や老親との心情的な関係、それに伴われる葛藤等をアセスメントする必要があるといえる。

6．スーパーバイズの有用性

本法に取り組む初心者には、以下の 3 つの点についてスーパーバイズが有用と考える；一つ目は open coding の継続的比較分析を行う際のデータの区切り方、2 つ目は、1 次コードから open coding の際のコード名、3 つ目には axial coding から中心となるカテゴリーを検討する段階（パラダイム・モデルの利用等に関して）である。

1) Open coding のデータの区切り方

データは、“意味のまとまり”がとれそうなところで区切るが、どこで区切るかが初心者では迷うところである。インタビューは話し言葉であり、対象が揺れ動く心情を吐露する場合は長文になる。ワン・フレーズの中に、何通りもの意味のまとまりを読み取ったり、一言一句を切りたくなる場合も想定される。意味のまとまりを掴むためには、まず、データをよく熟読する作業が必要になる。その上で、「スーパーバイザーといっしょに生のデータ（逐語録）を読み、区切る個所について迷う場合は示唆を受ける」と良い[46][47]。

2）1 次コードから open coding

前述したように、とくに 1 例目の最初の段階の分析では、無理に解釈して言葉を割り当てると恣意的になりやすい。むしろ中立、中庸な（neutral）表現の言葉を割り当てるようにするのが望ましく、ここでスーパーバイザーの示唆が参考になる。うまく要約する言葉が思いつかない場合は、対象が語った言葉をそのまま割り当てる（in vivo code）。ファイルにたまったデータから、自然と“言葉が浮かび上がってくる”感覚を掴むように努めるとよい[26][48]。

3）Axial coding でのパラダイム・モデルの利用

Open coding で生成・抽出された概念を集約・削除しつつ、時間の流れと起承転結の意味合いを帯びた因果モデル（パラダイム・モデル）に位置づけ、中心となるカテゴリーを検討してゆく段階が、「もっとも思考と解釈に時間を要する」作業である[49]。特性や次元のバリエーションを模索したくなったり、分析結果とは異なる対象の状況を把握することで結果の信頼性を確認したくなったりしてインタビューを増やしたい思いに駆られる。

実は、私の場合も数名の単身の娘介護者や就労していない介護者にインタビューを行った。しかし、実際はそれまで得ていた分析結果と様相の異なるデータを前に、圧倒された。スーパーバイザーからは、今あるデータを信じて地道に分析を続けることを教えられた。時間的な都合から、特定の地域に在住していた対象に絞ってのインタビューであったことも気になっていたが、それは本法が「領域密着型理論（substantive grounded theory、特定の具体的領域における理論）の構築を目的とする」点[50]から折り合いをつけ、論文では研究の限界として述べた。なお、インタビュー対象が何例で saturation に達するかについては論議がある[51]が、私自身は研究課題によるところが大きいと考える。

スーパーバイザーは研究を進める者にとっては伴走者である。忘れてならないのは、分析は当該研究者の思考と解釈をもって進める点であること、つまり「分析の舵取り役は当該研究課題に取り組む研究者本人である」点である[52]。分析技術に長けたスーパーバイザーが先走る（flying）のはスーパーバイザーの解釈による理論を導く恐れがあり、注意を要する。

本法に長けたスーパーバイザーから示唆を得ることは、初心者では必要不可欠である。さらに個人的には、最終的には信頼性や妥当性の保証の意味だけではなく、学術的な価値を明示するためにも学術学会誌に投稿し、レビューアーから認められることを責務と考える。なお Qualitative Health Research 誌は質的研究に関する権威ある学術学会誌の一つである。

追記

この連載にあたり、本法について詳細に解説した成書（冒頭に明記）に改めて目を通す機会を得た。そして本法の創設者である Glaser と Strauss 両博士の、分析における方針の違い[53]、その論議を踏まえ、さらに分析方法の実践に焦点を当てた「修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチ」の登場[54]と、本法が種々の変遷を経て今なお発展していることに気づいた。私自身は Glaser 博士のコーディングの方式で open coding を始め、Strauss と Corbin 両博士のパラダイム・モデルに沿って axial & selective coding に進み、分析結果を統合してゆく手順をとったことと、「修正版」は用いていない点を述べておく。

本法に関する私自身の理解と、つたない分析例をもとに解説をさせていただきました。データの収集にも分析にも相当の時間と passion を要する手法ではありますが、関心を寄せる方々に少しでも参考にしていただければ幸いに思います。

次回以降、新たな著者が自身の研究例をもとにナビゲーションを進めます。

【参考文献】

1） Strauss, A., & Corbin, J. (1990)/ 南裕子監訳，操華子，森岡崇，志自岐康子，竹崎久美子訳（1999）．質的研究の基礎（第 1 版），184-187, 医学書院
2） Strauss, A., & Corbin, J., p.185（南裕子 前掲書）
3） Strauss, A., & Corbin, J., p.61（南裕子 前掲書）
4） Strauss, A., & Corbin, J., p.99（南裕子 前掲書）
5） Strauss, A., & Corbin, J., p.119-139（南裕子 前掲書）
6） Strauss, A., & Corbin, J., p.42，p.191（南裕子 前掲書）
7） Strauss, A., & Corbin, J., p.191-192, 194（南裕子 前掲書）
8） Strauss, A., & Corbin, J., p.184-193（南裕子 前掲書）
9） Strauss, A., & Corbin, J., p.60（南裕子 前掲書）
10） Strauss, A., & Corbin, J., p.185（南裕子 前掲書）
11） Strauss, A., & Corbin, J., p.114，p.154-155, p.195（南裕子 前掲書）
12） Strauss, A., & Corbin, J., p.68-69（南裕子 前掲書）
13） Strauss, A., & Corbin, J., p.98-101, p.184-187

（南裕子 前掲書）
14) Strauss, A., & Corbin, J., p.207-234（南裕子 前掲書）
15) Strauss, A., & Corbin, J., p.189-193（南裕子 前掲書）
16) Strauss, A., & Corbin, J., p.189（南裕子 前掲書）
17) Strauss, A., & Corbin, J., p.196（南裕子 前掲書）
18) Strauss, A., & Corbin, J., p.99（南裕子 前掲書）
19) Strauss, A., & Corbin, J., p.59（南裕子 前掲書）
20) Strauss, A., & Corbin, J., p.119-148（南裕子 前掲書）
21) 木下康仁：グラウンデッド・セオリー・アプローチ：質的実証研究の再生，250-253，弘文堂，1999
22) 萱間真美：質的研究実践ノート：研究プロセスを進める clue とポイント（第 1 版），7，医学書院，2007
23) 萱間真美，前掲書，p.40-47.
24) 木下康仁：グラウンデッド・セオリー・アプローチの実践:質的研究への誘い（第 1 版），148-149，弘文堂，2008
25) 木下康仁（1999）．前掲書，p.224-262.
26) 木下康仁（1999）．前掲書，p.64-65.
27) Strauss, A., & Corbin, J., p.64（南裕子 前掲書）
28) Strauss, A., & Corbin, J., p.98-118（南裕子 前掲書）
29) Strauss, A., & Corbin, J., p.106（南裕子 前掲書）
30) Strauss, A., & Corbin, J., p.128-129（南裕子 前掲書）
31) 萱間真美，前掲書，p.51.
32) Strauss, A., & Corbin, J., p.196-197（南裕子 前掲書）
33) 萱間真美，前掲書，p.58-63.
34) Strauss, A., & Corbin, J., p.232-234（南裕子 前掲書）
35) Strauss, A., & Corbin, J., p.63-64, p.65-66（南裕子 前掲書）
36) 萱間真美，前掲書，p.66.
37) Flick, U. (1995)./ 小田博志，山本則子，春日常, 宮地尚子訳（2003）．質的研究入門: 人間の科学のための方法論，272，春秋社
38) Janesick, V. J.(1994). The dance of qualitative research design: metaphor, methodology, and meaning. In N. K. Denzine, & Y. S. Lincoln (Eds.), Handbook of qualitative research (pp. 209-219). Thousand Oaks, CA: Sage publications.
39) Lincoln, Y. S., & Guba, E. G. (1985). Naturalistic Inquiry. Thousand Oaks, CA: Sage Publications.
40) 萱間真美，前掲書，p.72-75.
41) Flick, U. p.273-278（小田博志 他 前掲書）
42) 木下康仁（2008）前掲書，p.238-239.
43) 袖井孝子：主婦の家庭外就業とケア機能の外部化，森岡清美監修，石原邦雄，佐竹洋人，堤マサエ，望月嵩編，家族社会学の展開，222-238，培風館，1993
44) Seligman, M. E. (1975). Helplessness: On depression, development and death. (Psychological series) San Francisco: W. H. Freeman.
45) Folkman, S., & Lazarus, R. S. (1990). Coping and emotion. In N. L. Stein, B. Leventhal, & T. Trabasso (Eds.), Psychological and biological approaches to emotion (pp. 313-332). Hillsdale, NJ: Erlbaum.
46) 萱間真美，前掲書，p.72-73.
47) 木下康仁（1999）．前掲書，p.230-231.
48) 萱間真美，前掲書，p.75.
49) 萱間真美，前掲書，p.74.
50) 木下康仁（1999）．前掲書、p.121-123.
51) 太田喜久子，萱間真美，山本則子，大川貴子：研究計画書の作成：座談会 Grounded Theory Approach を用いた看護研究実践論．Quality Nursing，5(9)，62-68，1996
52) 萱間真美，前掲書，p.73, 76-78.
53) 木下康仁（1999）．前掲書，p.60-72.
54) 木下康仁：グラウンデッド・セオリー・アプローチの実践:質的研究への誘い（第 1 版），弘文堂，2008